

2012年度 私立大学図書館協会東地区部会 館長会

1. 日 時：2012年6月8日（金）12：10～13：30
2. 会 場：東海大学 高輪キャンパス 1号館2階1202教室
3. テーマ：「学生の意識や行動の変化と、図書館のあり方」
4. 司 会：明治学院大学図書館長(東地区部会長校) 秋月 望

5. 議事

(1) はじめに

司会の秋月望 明治学院大学図書館長より、挨拶があった。

(2) 意見交換

司会の秋月望 明治学院大学図書館長より、今回のテーマの趣旨説明があった。

学生のライフスタイルの変化、メディアの発達などの中、図書館はどういう形でトータルな学習の場として学生に場を提供していくのか。グループ学習の場の提供の必要性、またデジタル化により、大量印刷やコピーアンドペーストなど新たに起こる問題などへの対応をいかにすべきか。

図書館長という立場と同時に大学で学生と接し教えているという立場もあわせて、今の図書館という環境の問題について話していきたい。

いくつかの大学の方より発題、事例の発表をしていただいた。

事例発表については、下記各大学図書館の館長にお願いをした。

駿河台大学 酪農学園大学 新潟国際情報大学 明治大学 東北福祉大学
東京電機大学 立教大学

・新キャンパスへの移転を機会に、時代のニーズに合うような形の組織にした。図書館と、大学内の視聴覚機器あるいはコンピューター授業の教室等の、教育研究に関する情報資源の管理運用から、情報資源の活用促進を行っている。プライベートクラウドの構築、ハイビジョンを擁したデジタル化、ICタグの導入などを行っている。

図書館のエリアについて、閲覧エリア、静粛エリア、ディスカッションエリア、グループスタディ、ラーニングコモンズ、PCを利用するエリア等用途でゾーニングをしている。

図書館は情報の提供だけでなく、授業などで活用する場になりえないかと考え、学生が持つ多種多様な情報機器に対応した環境の提供、情報ストレージを共通化することなどを環境を整備していった。

個人の自習から多目的な学習ができる空間を考えた。図書館エリアを使って、コミュニ

ケーションするということを検討、ラーニングコモンズにホワイトボードを一面とマーカーペンにおいて、学生が自由に使える環境を用意したところ、学生同士で教えあうような風景が見られるようになった。

ラーニングコモンズには個室も用意して、プロジェクターを使ってプレゼンテーションの練習をするなど、活用のしかたを考えている。静粛エリアでは、公務員試験や資格試験など勉強に集中できるようなエリアも用意している。今後、図書館ではそういった学びということの、より色々なことを展開していくことになると思う。

・学生が空き時間に DVD を見たりパソコンでネットを活用したりできるようメディアセンターを作った。1階がパソコンの自習室、2階が AV コーナー、メディア系の授業ができるスタジオもある。3階4階が図書コーナー。パソコン、AV コーナーに人気集中してしまう傾向がある。図書館職員を中心に検索ガイダンス、展示コーナーの充実、教員と連動した図書雑誌の利用方法の周知を努めているが、なかなか効果が上らない。文科省から学習時間の確保、図書館との連携ということがいわれているが、それに繋がる事業を今後メディアセンターを中心にして、さらに充実させていきたいと考えている。

・ここ4、5年入館者数、貸出人数、貸出冊数等が落ちてきているため、様々な工夫をしている。従来の閲覧スペースを改装し、ラーニングコモンズ、机とホワイトボードを置くなど環境を整えたり、DVDの閲覧スペースにプリンターにおいて、図書を持ち込んでパソコンを見ながら、レポートを作ることができる環境に変えた。また教員と連携して講義でレポートを何回か出してもらい、図書を指定して複数冊そろえてもらい、指定図書の何冊かのなかから1冊読んでレポートを書かせるということを行った。これらの工夫により2011年度の実績で入館者数、貸出人数ともにアップした。

またオンデマンドプリンターに変え、ポイント制で年間1000枚を上限にし、それ以上は課金をした。これによりプリントアウト枚数が大幅に削減した。

・キャンパス内の補修とともに、図書館の閲覧スペースを増やし、パソコンを利用できる場所を作った。非常に人気があり、図書とパソコンの情報をつきあわせてグループ学習等行っている。利用者数も伸びた。

学生が情報の洪水の中で、情報の価値をどう判断するかの問題で、単に情報を得る以前の教養教育の部分、土台があって初めて情報を適切に利用できるのではないか。図書館で図書と接することはそのためにも大切で、教養教育を推進していく役割の一端を担っていく必要があるのではないかと考える。そのためには図書館員は学生の教育に積極的にかかわる姿勢を持ってほしい。

事例として、学内で懸賞論文を行う際、今社会で起こっている様々なテーマをとりあげ、そのテーマと連動するような参考文献を図書館で紹介することで、学生が社会的な問題に

対して目を見開かせる方向へ持っていきたいと考えている。

・プロジェクターとスクリーンを備えた、ガラス張りの部屋で授業の準備活動などが非常に人気である。図書館という知的な場において、眺めのいいところで授業準備をすることの楽しさが学生、教員にあるのではないかと思う。昨今学生の図書館離れが課題で、予算の問題、職員の配置の問題、等あるが、最終的には図書館がどれだけ学生を引き付ける努力をしているか、というところに関わってくると思う。たとえば、花瓶の中に花1輪いけるといいうささやかなことでも、学生に図書館のほうに目を向けさせる努力が必要だと思う。

夏休み、教員全員が学生に対して、自分が読んで感動した図書として推薦図書を1冊読んで学生に提示し、学生がそのなかから1冊読んで夏休みに読んで読書感想文を書いて提出するが、その本を図書館で購入して備えることで連携をとっている。

・授業で共同研究という形でグループ学習を進めており、必読文を最初に読ませてから必要な場合に関連情報を集めさせて、とりあえず紙媒体をおさえてから情報について考えさせている。情報を集めるところから始めると、重要な紙資料に接しない恐れがある。図書館としては図書館活用法や情報リテラシー教育に堪能な図書館の職員をうまく活用させるように誘導して、図書館の職員に気楽に相談できるような図書館のレイアウトや、適切な人員な配置を心がけてきた。

新しい図書館建築に於いて、人と人、人と情報を結ぶ架け橋としての図書館を作っていこうと考え、多様なユーザーのニーズにどうやって応えていこうかと考えた。学生は1人ではなかなかできず、グループで気さくに討論するとか、あるいはまた語り合う、という場を作ることが必要なのではないか。講演などができる多目的ホール、展示できるギャラリー等を設け、またカフェテリアも作って気分転換をはかってもらうことを考えた。情報リテラシーや図書館活用法が学べるような活動的な活発なフロアと、1人で思索にとめるような静寂な空間のフロアを設けるような環境整理を行った。

・iPhoneの普及とともに、図書館内での充電をOKとした。それをすることによって、利用の増加とともに、学習環境をストレスのない形で提供したいと考えた。貸出用PCの利用も大変多く、図書館と、外の学習室との敷居を可能な限りなくしていきたい。図書館の中にとどまるのではなくてキャンパス全体を図書館にしていこう、というコンセプトで、新しい図書館建設を進めている。

・最近の学生は、家庭の経済的な状況もあるかもしれないが教科書を指定してもなかなか買わない。いっそのこと学校で人数分買いそろえて図書館で貸したら、という提案をしたがそれは難しかった。だがそうすると学生は本も買わない、勉強もしない、という状況が起きてしまう。教員は大量にコピーをして学生に配布することになるが、著作権の問題が

ある。学生の経済状況、図書館の蔵書の考え方、その他でライブラリアン、大学の経営の考え方とぶつかっているが、何か良いアドバイスがないか。

・著作権の問題、倫理的な問題も含め、適正な教材資料あるいは学生の教材の提供ということを考えなければいけないと思う。学生の経済状態も、特に私立大学の場合は少なからぬ学費負担もあり、学生たちの状況はやはりかなり苦しい。その中で、高い書籍などどう使わせたらよいのか、という問題はある。

図書館関連の研修会なども、委託化が進んでいくと、図書館の中で水準を維持し高めていく、学生たちに対してその高い水準の場として提供していくという場合に、今の流れの中でいえば、専任だけということではなくて、図書館スタッフ全体という風に考えていくべきなのか。これも大きな問題と考える。

・i-Pad を図書館に導入したところ利用者が増えた。i-Pad で気がついたことだが、コンテンツが個人利用は OK だが図書館では不可のものがある。大きなビジネスモデルの中で、図書館の付加価値を作っていないといけない。それから、学校の中の情報規制の問題として、特に youtube を学生にどう見せるか。現在は規制をかけているが youtube に学術的なものも多い。時代は変わっているので、大学として、コンテンツを学生に見せるのを規制をどうするのか、ということの本気になって考えないと、図書館に i-Pad を備えても見たいものが見られないということが起こる。

・i-Pad 等は学生の方が影響が早く、いろいろ活用している。ただ大学の図書館なので、学生向けにどのように適正な情報提供をし、またどのような形で図書館を活性化していくのか、ということが問題だと思う。利用者教育の需要が増大しており、図書館職員が今までやってきた図書館業務のほかに、学生に対する指導の部分で相当な時間をとることが起きている。スタッフについても、学生から見れば同じ図書館員だが、雇用形態からいくと様々な人が存在し、学生の方から見えない部分で、サービスその他、何か違うといったことが起こるような気がする。

また、コピー&ペーストの問題、レポートなどでそれをどう見分け、できるだけ手がかからないように対処するのか、あるいはどういう風に注意を喚起するのか、情報の多様化、それから量的な拡大と共にやはりそれを使う側の倫理的な感覚など、情報をどのように見分けて、それを精査していくという部分の教育というものを合わせて行わなければならないが、大学のどういう場でどのように行うのか、難しさがある。図書館、情報センターというような、学部や学科とは大学の教育組織とは違うところで何らかの貢献をすべきかと思うが、現状なかなか手が回っていない。